◉ 第３回こらぶれーしょんセミナー

「子どもたちのありのままの姿をとらえる」をテーマに開催しました

地域協働研究教育センター 地域志向協働研究「子どもたちを豊かに育むまちづくりのための『こらぶれーしょん』プロジェクト」では、1月31日（日）、「第3回こらぶれーしょんセミナー」をみんなのき保育園（宇治市五ヶ庄梅林）で開催し、子育て支援関係者・保育士・保護者・大学教員・学生ら約80名が参集しました。今回のテーマは「子どもたちのありのままの姿をとらえる」。セミナーの第１部では、保育士をめざす4回生ゼミが行った、「学生目線で子どもらしい姿をとらえる、保育所での写真撮影」というフィールドワークの成果を、2名の学生が写真を交えて報告しました。第２部のシンポジウムでは、橘健一氏（立命館大学産業社会学部・文化人類学者）、栗山圭子氏（京都新聞文化部・新聞記者）、杉本一久氏（宇治福祉園理事長・保育園長）の、専門フィールドの異なる3氏をシンポジストに迎え、子どもや親子・家族のありのままの姿をとらえるそれぞれの視点や方法・成果などについてお話しいただき、より広い視座から学びと気づきを深めることができました。

◉ 地域入門―リフレクション

新規科目「地域入門」のリフレクションを実施しました

今年度の秋学期より新たにスタートした「地域入門」は１年次生全学必修科目です。

2月10日（水）に実施した「地域入門―リフレクション」では、授業を終え、受講生の全8回の授業を通しての学生の変化、学期末の課題の状況について、滋野浩毅、木田竜太郎両地域協働研究教育センター専任研究員から報告がありました。

滋野研究員からは全8回の授業の流れと「ＳＡは授業を変えたか？」と題し、ＳＡが果たした役割、総合社会学部の学生の様子についての報告がありました。

木田研究員からは、成績評価方法、学期末課題の設定について、また臨床心理学部の学生の様子についての報告がありました。

3名の教員、SA6名、フィールドリサーチオフィスの職員2名の教職学協働で実施した授業の意味や意義を振り返るとともに、この授業が受講生にとってどのような授業だったのか、「ともいき人材」となるべく「地域志向教育」の動機づけをすることができたのかを考えました。

今年度のこのリフレクションをふまえ、2016年度の入学生と9月より新たな「地域入門」を実施していきます。

お知らせ

平成26年度文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（大学COC事業）

地域のみなさんから、地域を志向した「共同研究」を募集します！

本事業は、自治体職員、団体・企業、地域住民と本学教員による「住民参画型」ならびに「産官学協働型」の共同研究を募集します。地域福祉・保育（家庭児童福祉・保育）・学校教育（小中高大連携・郷土教育・観光学習）・メンタルヘルス（復職支援・自殺予防）、観光、商店街、まちづくり、中小企業研究・地場産業、都市経営等のテーマにおいて、地域課題解決に取組む共同研究を支援します。

- **応募期間：2016年2月17日（水）～ 2016年3月11日（金）**
- **募集対象：**

(1)「住民参画型」共同研究…（Ⅰ）30万円（上限/1年間）【3件募集】、（Ⅱ）50万円（上限/1年間）【1件募集】

地域住民とともに地域ニーズを汲み取り、地域住民が主体となり地域志向研究に継続的に取り組める仕組みづくりを推進し、地域課題に取り組む研究に対し、経費補助を行います。

(2)「産官学協働型」共同研究…（Ⅰ）30万円（上限/1年間）【3件募集】、（Ⅱ）50万円（上限/1年間）【1件募集】

本学・企業・行政が連携し、各々の領域において単独で解決が困難である地域課題に対し、それぞれのリソースを持ち合わせることによって新たな解決方法を模索する研究に対し、経費補助をいたします。

※書類を提出する前に、必ず事前に京都文教大学フィールドリサーチオフィスへご相談ください。
※応募書類提出後、本学教員とのマッチングを行います（内容によっては、マッチング不可の場合や応募書類が受理されない場合もあります。ご了承ください）。

こんな方はぜひ、お問合せください！
- ●地域活動に取組む中で、課題を抱えており、解決方法を模索している方
- ●地域活動に取組む中で、地域課題や地域ニーズの把握、課題分析等の調査や研究に取組みたいが、方法がわからない方
- ●本学のリソースを活用し、本学教員と協働して地域課題や研究に取組みたい方

- **お問合せ・提出先：京都文教大学フィールドリサーチオフィス**

京都文教大学 地域協働研究教育センター
ニューズレター「ともいき」vol.6（2016年3月発行）

発行：京都文教大学地域協働研究教育センター

【お問合せ】
京都文教大学フィールドリサーチオフィス
〒611-0041　京都府宇治市槇島町千足80　TEL：0774-25-2630　FAX：0774-25-2822
E-mail：fro@po.kbu.ac.jp　URL：http://www.kbu.ac.jp/kbu/　京都文教大学

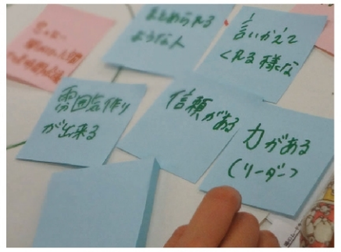
京都文教大学　文部科学省 地（知）の拠点

京都文教大学 地域協働研究教育センター

ニューズレター ともいき TOMOIKI vol.6

2016年3月発行

「京都府南部地域 ともいき（共生）キャンパス」でのさまざまな活動をお伝えします。



活動報告1 ＜教育＞

「地域企業に学ぶ社会的ニーズ」
企業訪問時の様子

「課題発見→仮説設定→仮説検証→課題解決→アウトプット（発表・報告書作成など）」という流れを、グループワークを通じて行うPBL科目

〈2015年度秋学期〉
プロジェクト科目「合同成果発表会」

2016年1月16日（土）に実施しました。

今学期開講の全11クラスが「地域」会場と「テーマ」会場に分かれ、秋学期の学びの成果について発表しました。

地域に根ざした授業内容を扱う「地域」会場では6クラスが発表。受講生自身が半期の授業の中で「地域」をフィールドに学んだことや、課題解決に向けての取組について発表しました。会場は他クラスの受講生や参加者からの質疑応答も活発に行われ、発表した受講生はさらに学びを深める機会となりました。

〈今学期の結果〉　最優秀賞：「巨椋野菜でカフェ・ランチ！」クラス
優　秀　賞：「宇治・伏見　防災プログラム」クラス

地域のグローバル企業に学ぶ
担当教員：手嶋英貴

京都土産の老舗のご協力のもと、事業内容や海外事業展開での経験を学びました。そのうえでビジネス体験として、海外のバイヤーをターゲットにした企業ホームページの「企業紹介」、「商品紹介」ページの英訳の仕事を行い、関西（ローカル）と世界（グローバル）を結ぶ実務に触れました。

協働のまちづくりクラス
担当教員：滋野浩毅・木田竜太郎

宇治市や京都市伏見区、城陽市での取材を通し、様々な立場の人たちとの対話を行うなかで、他者の意見を聞き、自らの意見を表明することを目指したクラスです。取材結果は、学生目線での地域の魅力発信を念頭に、新聞『協働通信』を作成しました。

宇治・伏見　防災プログラム
担当教員：澤達大

防災に関する知識を身につけると同時に、大学周辺地域（宇治市小倉）で防災上の課題に対し、北小倉地区の民生委員・児童委員の皆様と協働し、災害発生時の備えについて考え、要援護者をサポートする啓発カード「スマイルカード」を考案しました。

地域に学ぶ社会的ニーズ
担当教員：手嶋英貴

「宿泊・居住」をテーマに京都府南部に位置する企業３社への企業訪問を行い、企業の現状や社会にはどのような課題があるのか、またどのような人材やアイデアが求められているのかを考察し、社会のニーズに合わせた事業アイデアを考案しました。

ニュータウンのまちづくり
担当教員：小林大祐

大学に隣接する向島ニュータウンは少子化、超高齢化、貧困などの多くの問題を抱えています。この授業では、京都文教マイタウン向島を拠点に向島ニュータウンの子どもたちとキッズキッチンなどのイベントを企画実施し、地域の子どもを通しての「まちづくり」のあり方について考えました。

巨椋野菜でカフェ・ランチ！
担当教員：貴島良介

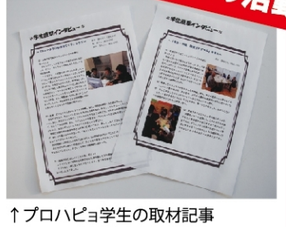
大学に隣接する巨椋池干拓地の農業活性化をテーマに京都府立京都すばる高校と連携し、カフェにおける地元農産物を使った新作メニューの商品化を目指し、商品開発とマーケティングを行いました。考案したメニューは、実際に近隣のコミュニティカフェのランチメニューとして商品化されました。

プロハピョの活動

プロジェクト科目「合同成果発表会」の「地域」会場では、学生有志団体「プロハピョ（プロジェクト科目「合同成果発表会」学生実行委員会）」が企画・運営を行いました。

今回で4回目の活動となりますが、新たな企画として、学生スタッフが発表クラスの活動と代表学生に取材を行い、クラスの紹介記事を作成しました。「合同成果発表会」は発表者が聴衆を前に発表を行い、質疑応答を行うという双方向の発表会ですが、そこにプロハピョ学生の取材記事という新たな視点を加える機会となり、参加者が各クラスの取組・学びをより深く知ることができました。

↑プロハピョが「合同成果発表会」について学生に広報する様子



↑プロハピョ学生の取材記事

活動報告2

← 福島氏による講評

会場の様子 →
学生を中心に約90名が参加

2015年度採択の4プロジェクトが活動の成果を発表しました
地域連携学生プロジェクト成果報告会

2016年2月17日（水）に実施しました。

地域に根ざし、地域に学び、地域の課題解決を目指す学生たちの自主的な取組を支援する「地域連携学生プロジェクト」。5月に行われた採択選考会で選ばれた4つのプロジェクトが、これまでそれぞれの地域で独自の活動を進めてきました。成果報告会では、これまでの取組を振り返り、成果と課題を発表しました。採択選考会と同様、学外審査委員3名（下記参照）と、森正美地域協働研究教育センター長をはじめとする学内審査委員8名による活動評価と講評が行われました。

【学外審査委員】
・秋元 尚氏（宇治市政策経営部政策推進課長／写真左）
・亀村 佳都氏（京都市文化市民局地域自治推進室 京都市まちづくりアドバイザー／写真右）
・福島 明美氏（地域づくりアドバイザー）

京都文教大学バスツアーズ

大学の近くにある向島ニュータウンに暮らす独居高齢者を対象に、バスツアーを企画・実施するプロジェクトです。ひとり暮らしの高齢者は、体力面や経済面で旅行に行く機会に恵まれておらず、外出の楽しさの提供と同じ地域で暮らす方同士の交流を目的に、参加者のニーズにあったツアーを企画し、今年度は、7月、9月、11月、2月と4回ツアーを実施しました。審査員からは、ニュータウンの現状を把握し、参加者の声に応えようとする姿が評価されましたが、参加者のその後の変化などを調査するなど、活動が社会にどう貢献できているかの検証も必要、との声がありました。

響け！元気に応援プロジェクト

宇治を舞台にしたアニメ作品「響け！ユーフォニアム」を通して地元とアニメファンとを繋ぐ取組をしています。アニメ好きのメンバーが多く、自分たちが楽しみながら地域との接点を見つけ活動を進めていく姿が評価されました。また、SNSを使った全国のファンに向けた広報や、アニメの大きな要素である「音楽」をテーマにした子ども向けイベントの実施などターゲットにあった発信も進めています。結成1年目のプロジェクトとしては良いスタートを切れましたが、次年度は、地域とのつながりという点に重点を置き、活動の意義や到達目標などを明確にしていくことが大切との意見がありました。

宇治☆茶レンジャー

宇治茶を学び、宇治茶を通した交流促進と魅力発信に取組む、今年で6年目のベテランプロジェクトです。毎年秋に開催する「親子で楽しむ宇治茶の日」には、約1万人もの参加者があり、地域にも定着したイベントに育ってきました。このイベントは、例年100名程のスタッフを集め実施していますが、今年は、学内に留まらず他大学学生や宇治市高齢者アカデミー生をはじめ一般市民からも募集しての実施となりました。市民を巻き込んだ取組と、イベントの企画運営だけでなく、お茶への知識を高める学びにも力を入れている点が高く評価されました。来年度は、小学校などとの連携やコラボレーションに期待する声もありました。

商店街活性化隊 しあわせ工房 CanVas

宇治橋通り商店街の更なる活性化を目指し、お店とお客さん、お店とお店を繋ぐ役割を担うプロジェクトです。宇治橋通商店街振興組合の公認を受け、商店街イベントに参加する他、商店街のお店を学生目線で紹介する「イチ押しプレート」を定期的に作成し、ぶんきょうサテキャン宇治橋通りに掲示しています。3月には、新イベントの実施を計画しており、それに向けて早い時期から視察や研修を重ねてきました。その地道な取組や、情報発信だけでなく、学生とお店との距離を縮めることも目的としたプレートの作成が認められる一方、「活性化」とは何か？原点に返って目的を見つめ直すことも必要との意見もありました。

平成27年度「ともいき研究」成果報告会
京都府南部地域まちづくりミーティング

2016年2月17日（水）に実施しました。

2月17日（水）、「平成27年度ともいき研究成果報告会／京都府南部地域まちづくりミーティング」を本学にて開催しました。

本学と地域・行政・団体・企業が連携・協働して地域課題に取組む「ともいき研究」（「地域志向協働研究」・「地域志向教育研究　ともいき研究助成事業」）。今年度採択された研究プロジェクトの研究成果報告を「子ども・教育」「福祉・文化・国際」「まちづくり」の3会場に分かれて行いました。

今年度は研究成果報告を前半に行い、その内容を深める目的で後半に「京都府南部地域まちづくりミーティング」を開催することにより、より一層の研究の深化と、分野が異なる研究者や参加者が地域をテーマに横断し話し合うことで新たな展開を図る機会となるよう企画しました。

「京都府南部地域まちづくりミーティング」では、研究会メンバーと一般参加者とがテーブルを囲み、研究成果報告を受けての質疑応答や意見交換が活発に行われました。当日は、3会場併せて約200名もの参加者が集まり、研究の参考となる意見や想いをたくさん提案いただきました。それらを来年度以降の研究に活かし、「ともいきキャンパス」の具現化を推進していきます。

● 平成27年度「ともいき研究」成果報告研究プロジェクト

＜子ども・教育＞　P.4	＜福祉・文化・国際＞　P.5	＜まちづくり＞　P.6
「子どもたちを豊かに育むまちづくりのための『こらぶれーしょん』プロジェクト」（臨床心理学部 教授 柴田長生）	「京都府南部地域における障がい者の就労支援に関わる研究」（臨床心理学部 教授 吉村夕里）	「宇治・伏見地域の観光資源開発と地域振興」（総合社会学部 准教授 片山明久）
「からだを通じてこころに働きかける子育て支援」（臨床心理学部 教授 金山由美）	「精神障がい者の家族（ケアラー）への情報提供と支援に関する実践的研究」（臨床心理学部 講師 松田美枝）	「地域コミュニティ活性化推進のための制度改革にむけた方策の検討」（総合社会学部 教授 森 正美）
「公立・私立の保育施設を橋渡しし、保育の質の向上と地域のパートナーシップを強化するシステム構築の可能性を探る」（臨床心理学部 教授 中島千惠）	「対人援助のモラールの向上を目指した多職種相互乗り入れ型の研修プログラムの開発に関わる研究」（臨床心理学部 教授 吉村夕里）	「市内の伝統的家屋の保存・活用に関する可能性研究」（総合社会学部 講師 小林大祐）
「親子で楽しむおもしろさんすうとおはなしのせかい」（臨床心理学部 教授 亀岡正睦）	「宇治の音風景100選」（総合社会学部 教授 馬場雄司）	「宇治3商店街の抱える課題の明確化と活性化に向けた方策の検討」（総合社会学部 講師 東 正志）
「官学連携による『宇治学』副読本作成と現場での活用に関する研究」（臨床心理学部 准教授 橋本祥夫）	「宇治市における文化発信イベントの手法研究」（地域協働研究教育センター 専任研究員 滋野浩毅）	「宇治市における愛着度形成に関わる政策提言のための研究」（総合社会学部 准教授 山本真一）
「まきしま絆の会、宇治市、京都文教大学が紡ぐ地域連携の創造－地域と結びつく親と子の絆づくり、子どもへの学習支援－」（臨床心理学部 教授 寺田博幸）	「グローバル化時代における地域の国際協力のあり方を探る」（総合社会学部 教授 松田凡）	「京都南部・向島地域のニュータウンにおける大学・住民協働のまちづくり研究」（総合社会学部 教授 杉本星子）
「新聞を通じて地域の子どもたちの地元愛を育む研究」（臨床心理学部 准教授 橋本祥夫）	「地域におけるセルフケア推進団体のネットワーク形成と地域社会に与える影響」（臨床心理学部 教授 濱野清志）	「宇治川周辺地域の防災・減災に向けた課題への取組み」（総合社会学部 准教授 澤 達大）

● 京都府南部地域まちづくりミーティング

後半では、下記のようにテーマ別に分かれて、ディスカッションを行いました。

＜子ども・教育＞会場 → 保育／学習支援／地域学習
＜福祉・文化・国際＞会場 → 福祉／地域文化／多文化共生
＜まちづくり＞会場 → 観光／商店街／地域コミュニティ／定住促進

各テーブルで話し合った内容について紹介します。

テーマ 保育

＜進行担当研究プロジェクト＞

■ 子どもたちを豊かに育むまちづくりのための「こらぶれーしょん」プロジェクト
■ 公立・私立の保育施設を橋渡しし、保育の質の向上と地域のパートナーシップを強化するシステム構築の可能性を探る

学生、アカデミー生、教員の合計11名で現在の子どもたちの状況、地域でできる子育て支援について考えました。

学生は地域での課外活動のニーズはあるのに、学生には伝わっておらず、参加できていないという実情がわかり、情報告知・情報伝達に関して課題のあることが確認されました。今後、活動を更に活性化するための大きなヒントになりそうです。

また、小学生の頃までは地域の行事等に参加していても、成長するにつれて少しずつ子ども同士で過ごすことが減り、子ども同士、家同士の横のつながりが減ってきていることが話題になりました。地域での自治会・子ども会活動の不活性化が進んでいることも、これらの問題の基盤になっているようです。

これらをふまえ、「子ども『に』遊んでもらう!」をキーワードに、テレビゲームではなく、「子どもが子どもらしさを取り戻す」ような遊びを考えながら、「祖父母が孫『に』遊んでもらう!」という「三世代交流」の企画を学生主導で実施してはどうかという案が上がりました。
時間的にゆとりがある祖父母世代に焦点を当てることがチャンスにつながりそうです。

学生は子どもと関わることで大きく成長します。一方で、社会的には保育の質や課題も浮き彫りになっています。そんな中で、地域、保育関係者、本学とが連携して「楽しく交流して、みんなが育つ場」の提供を行うことで、本学の学生も成長し、また地域では「子どもがありのまま楽しく」過ごせるきっかけ作りになるのではないかという意見が交わされました。

テーマ 学習支援

＜進行担当研究プロジェクト＞

■ 親子で楽しむおもしろさんすうとおはなしのせかい
■ まきしま絆の会、宇治市、京都文教大学が紡ぐ地域連携の創造 －地域と結びつく親と子の絆づくり、子どもへの学習支援－

学習支援について話し合ったテーブルでは、14名の参加のもとで、学生が参画する地域や学校への具体的な支援に対する質疑等があり、改めて地域の期待が大きいことを認識する機会となりました。

宇治市の職員の方から、学生が参画しやすいボランティアの在り方についての質問に対し、学生からは、具体的でボランティアの内容を分かり易く示してもらうことが大切なこと、また、それに関わった先輩ボランティアの声などがあれば参考になり、参加しやすくなるといった声も聞くことができました。

高齢者アカデミーの方々からは、地域の子ども支援活動にどのように関わればよいのか質問が続きましたが、担当教員から、学生や地域の方々がいっしょになって子どもと楽しく関わっていただくことが大事と応答があり、アカデミーの方々に参画していただく声かけともなりました。

学校で見る子どもの姿と少し違った放課後の子どもの姿を見ていただき、子どもと楽しく関わっていただくことで、子どもの安心感を高めていくことを共通の願いとして話し合いをまとめることができました。

テーマ 地域学習

＜進行担当研究プロジェクト＞

■ 官学連携による「宇治学」副読本作成と現場での活用に関する研究
■ 新聞を通じて地域の子どもたちの地元愛を育む研究

地域学習のテーブルでは、宇治市教育委員会教育支援センターとの官学協同研究として2年目を向かえた「宇治学」、城陽市市民活動支援センター・洛南タイムス社との連携企画として初年度を終えた「子どもたちの郷土愛」を育む研究をベースに、①地域の中でどのように子どもを育てるか、②地域学習を通じてどういったことを学ばせるかについて議論しました。参加者は本学教員のほか、地域の子どもたちの“今昔”について体験を交えた貴重なお話を伺った高齢者アカデミー生をはじめとするベテラン（最年長は83歳）に、同人数の現役学生（最年少は立命館大学1回生）がそれぞれの問題意識から意見を述べ、さらに研究協力校である三室戸小学校の吉永均校長が学校現場の取組と課題を紹介、域学協働と世代間交流を象徴するテーブルとなりました。トピックとしては、例えば宇治茶の製法や作法を学んだ子どもが、それをレポート等の成果物にまとめる以上に、家庭に帰って実際に親に（礼法を含めて）お茶を淹れるなど、子どもの確かな成長が実感できる地域学習の在り方について活発な議論が展開され、さらに「宇治学」と「郷土愛」の2つの研究のコラボレーションなど、次年度に向けた課題についても意見が交わされました。

テーマ 福祉

＜進行担当研究プロジェクト＞

- **京都府南部地域における障がい者の就労支援に関わる研究**
- **対人援助のモラールの向上を目指した多職種相互乗り入れ型の研修プログラムの開発に関わる研究**

「福祉」のテーブルでは、吉村夕里教授の共同研究プロジェクトの報告を受けての感想を述べ合うとともに、今後の課題として、①障がい者の就労支援、②学生の社会福祉教育への障がい当事者の参画について、③障がい者・高齢者の居場所づくりなど、参加者の日々の活動のなかで感じていることについて語り合いました。

援助職を目指す学生の「してあげる」思考から、人生の先輩として「教えてもらう」という発想の転換が必要であること、高齢者、認知症患者、障がい者が必要な居場所づくりについても、それぞれが「必要とされている」役割をもつなど、能力を引き出す機会とする環境づくりが必要であることが課題共有されました。

特に白熱した「大学における障がい者の就労支援」については、先進事例をみても、現状は単純作業が主であることから、障がい者雇用率という課題は解決しても、ステップアップを目指す障がい者の満足度からみると、まだまだ課題が多く、障がい者の能力・職域開発に繋がるモデルづくりが急務であると考えました。

テーマ 地域文化

＜進行担当研究プロジェクト＞

- **宇治の音風景100選**
- **宇治市における文化発信イベントの手法研究**

宇治市には、豊かな自然や歴史ある神社仏閣があり、そこでは、川のせせらぎや鐘の音が聞こえてきます。その音を通して、宇治の魅力を再発見しようとする取組「宇治の音風景100選」について、意見交換を行いました。

「音は聞く場所や状況によっても感じ方が変わる。」「人は、聴覚だけでなく、見て触れて、五感で音を感じている。」「その五感も一緒にいる人との共感や共有によって高められる。」「虫の声が風物詩であるのは日本人独特の感覚である。虫の声で季節を感じることができる。」「音は人の感性に深く関わるもの」、などの意見が交わされました。

地域住民や学生が、宇治ならではの音を探すことは、宇治の魅力の再発見のみならず、探す人の成長にもつながると結論付けました。

また、「宇治市における文化発信イベントの手法研究」について、「紫式部文学賞・市民文化賞」のチラシを見ながら意見交換を行いました。この賞について、若い人にも関心を持ってもらいたいという思いがあるのですが、学生にとって、チラシの反応は今ひとつであるということがわかりました。

この分科会での議論をまとめると、音と色という「視覚・聴覚に訴える文化発信」の可能性を発見できたといえます。

テーマ 多文化共生

＜進行担当研究プロジェクト＞

- **グローバル化時代における地域の国際協力のあり方を探る**
- **京都南部・向島地域のニュータウンにおける大学・住民協働のまちづくり研究**

このセクションでは、本学の教員・学生のほか、宇治市や城陽市・伏見区の行政関係者、そして市民の方々など計17名が集まって、多文化共生の視点から、主に外国人居住者と地元住民との交流について話されました。テーマとしては日本語教育や若者にとってのコミュニケーションなどいくつもの話題が出ましたが、ここでは特にユニークな視点として、多文化共生と都市交通の話題を紹介します。

京都府南部地域で外国人居住者が多く暮らす向島ニュータウンや西大久保団地は、いずれも商店街などの多いにぎやかな市街地の中心から少し離れており、交通の便が必ずしも良い場所とはいえません。同時にこうした団地は老齢世帯が多いという意味でも、買い物や病院に通ううえで不便であり、外国人にとっては日本語教室や様々な行政サービスを受けるうえで、消極的にならざるを得ない地域です。ここでは交通の不便さに起因する「文化圏」の形成ともいえる現象が生じており、交通弱者にとっては動けないことが大きな問題であることが指摘されました。この問題の解消のためには、当面バス便の増設・増便が有効ですが、行政単独でこれを実施するには経済的負担が大きすぎます。そこで、大学・企業・市民も協力し、例えば大学のバスを活用することはできないか、という具体的な提案がありました。

外国人観光客によるインバウンド効果ばかりが注目を集めていますが、中国やベトナム・カンボジアからの労働実習生は増えており、今後ますます多文化共生が重要なテーマとなることはまちがいありません。多数派の日本人住民の目が少数者にもどれだけ向けられるかがこれからの課題だ、と締めくくりの発言があり、実質的な議論ができたミーティングでした。

テーマ 観光・商店街

＜進行担当研究プロジェクト＞

- **宇治・伏見地域の観光資源開発と地域振興**
- **市内の伝統的家屋の保存・活用に関する可能性研究**
- **宇治3商店街の抱える課題の明確化と活性化に向けた方策の検討**

観光・商店街セッションでは、16名程度の参加者でディスカッションを行いました。ディスカッションに費やしたテーマをひとことで言えば、「一極集中型地域振興の見直し」です。

宇治・伏見は京都中心部から30分圏内にありますが、京都府外の人々は、「非常に遠い」という印象を持っています。これは京都市中心部に偏ったPRの結果であると思われます。

宇治・伏見に視点を移しても同じことが言えます。宇治ならば宇治橋周辺が、伏見ならば伏見稲荷周辺がPRの面でも、府の予算配分でも、偏っていないでしょうか。たとえば宇治ならば小倉・大久保があり、伏見ならば醍醐や桃山周辺があります。一極集中的にPRをしても、それ以外の地域に還元されている成果は少ないように思われます。

宇治・伏見地域がより効果的にアピールを行うには、地道ではありますが、積極的な発信をし続けること、また発信する中身にも工夫が必要です。観光資源や名産品をスポット的にアピールするのではなく、抹茶とお酒をうまく融合させた商品やPRができないか、点在する観光資源をひとつにつなぐような広報ができないかなど、「点」ではなく「面」としての地域振興が必要ではないでしょうか。

テーマ 地域コミュニティ

＜進行担当研究プロジェクト＞

- **地域コミュニティ活性化推進のための制度改革にむけた方策の検討**
- **宇治川周辺地域の防災・減災に向けた課題への取組み**

研究報告を踏まえ4つのテーブルに分かれて現在のコミュニティの課題、課題解決に向けてのアイデアについて話し合いました。

高齢化の進展や負担感の増加に伴い、町内会・自治会の役を引き受けられないなどの理由で脱会される方が増えていることや、一部では実質的に消滅する自治会も出てきていることなど、地域コミュニティの衰退を危惧する声がありました。

一方で、「防災」については若い住民も関心を持っており、防災を基盤としたまちづくりを推奨する意見が共有されました。防災活動に積極的に取組んでいる北小倉民生児童委員協議会では、宇治市の防災リーダー養成講座で学んだことを地域に還元していこうという思いから活動が活性化したことや、独自の避難マップの作成、要援護者の名簿収集等が実施され、他の団体とも協働して活動範囲を広げていくなど活動の展開も紹介されました。

さらに防災活動以外にも、まちづくり活動への空き家の有効活用や、住民の買い物の悩みを作らないことが安心して暮らせるまちづくりに繋がること、ライフスタイルの変化などを踏まえたまちづくりが必要であるなど将来のまちづくりについて議論がなされました。

テーマ 定住促進

＜進行担当研究プロジェクト＞

- **宇治市における愛着度形成に関わる政策提言のための研究**

このテーブルでは、7名（本学教職員、本学・他大学生、市民、行政の方）が参加して、宇治市の定住促進において重要と考えられる、人びとの地域に対する愛着や居住意向についてディスカッションを行いました。

ディスカッションでは最初に、愛着や居住意向の要因として考えられるものを付箋に書き出していきました。参加者からは、交通の利便性、保育施設、住環境、人間関係、家族など多様な要因が挙げられました。次に、そうした要因をテーブル全体で共有しながら、愛着度形成に影響を与えるとされる物理的環境と社会的環境に分類しました。このような分類により、ここで挙げられた要因には、地域コミュニティや人的ネットワークの形成といった社会的環境が多いことが確認されました。また、このディスカッションでは、若者は経済的事情により他地域へ移住することがあるが、高齢者は長年築いた人間関係を大切にするため居住を続けるという意見や、長いスパンで子どもの成長を考える母親の意向が居住行動の要因の一つではないかという意見が出されました。

今回のディスカッションを通して、地域の社会的環境が愛着や居住意向の形成において重要な鍵になることが導かれました。